令和元年10月28日

子どもたちのためのラジオ作り教室の開催について

JH8CBH 佐々木 朗

1 はじめに

私がこのアマチュア無線に出会うきっかけは、鉱石ラジオ。デパートのおもちゃ売り場のショーケースに入っていた。ロケット型をしていて、ロケットの先端のロッドを伸び縮みするとラジオが聞こえた。不思議だった。電波の不思議さに出合った瞬間である。それから、学研のマイキットを買ってもらった。リード線をつなげて、ラジオ、センサー、ワイヤレスマイクなど、食い入るように毎日没頭した。それから、当時深堀町にあった富士模型店に通った。2SB54、1N60、並四コイル、ポリバリコン、その他、若干の抵抗やコンデンサでラジオを作った。全ての部品が輝いていた。そして、ラジオが鳴った時、至上の喜びだった。

中学校に入り、必修クラブで電気工作クラブに入り、的場中学校アマチュア無線クラブ（JA8YPY）に誘われ、入部。中三の春に同級生四人で札幌に行き、電話級アマチュア無線技士を取得。無線とのなれそめはこのくらいにしておく。

50年近く経っても忘れられないのが、初めて自分の作ったラジオから聞こえてきた放送。大人になって、しかも教員という立場で、この感動を子どもたちにも味わってほしいとつねづね考えていた。

2 静内クラブ創立50周年パーティーでの出会い

大学を出て、最初の赴任地が日高管内の静内町（現新ひだか町）。教職は右も左もわからなかったが、無線だけは、十分わかっていた。その頃静内ではたくさんの方が開局し、22歳とは言え、無線経験の長かった私は、電信もできたし、HFの交信もバリバリできたし、みんなからかわいがってもらった。

その静内アマチュア無線クラブも今年で50周年になった。会長の横山さん（JA8GSC）曰く、「60周年はもうないだろうから、最後の祝典としたい。」と。ずっと静内で活動している方もあり、籍はあるが活動から遠ざかっている方もあり、そして、転勤などで、静内を離れた方もあり、十数名ではあったが、無線談義に花が咲いた。

先崎さんとも、その会で出会った。私より前に静内時代を過ごし、私の赴任時（昭和58年）には、すでに静内から離れており、時期としては、すれ違いである。

私のアマチュア無線に対する思いを語り合っている中で、「ラジオ作り」の話に結び付くまで、時間はかからなかった。先崎氏も高校生からのアマチュア無線家であると共に、現在電波適正推進委員として、電波教室としてラジオ作りを開催するなどの活動推進していた。先崎さんも道央地区で同様の教室を開催していたし、私も、昨年も自腹ではあったがラジオ教室を開催していた。二人の波長が

合うと、その後はとんとん拍子だった。函館での再会を約束して、一夜の楽しい時は終わった。

3　果たして申し込みは来るのか

教育委員会との調整が遅れて、チラシの配布は金曜日を締め切りとした周の火曜日だった。厚沢部町内の全小中学生にチラシを配布した。この手のものは、参加しようと思う方は、すぐ申し込みをするだろうし、募集期間が長いからと言って、申し込みが多くなるとは言えないものである。

申し込みは学校への放課後の電話からか、QRコードによるインターネットでの申し込みかである。配布した日は電話申し込みはなく、帰宅。いつものようにパソコンの前に座るが、しつこい位に新着メールのチェック。「まだ来ない。」

ピンポーン19時7分。厚沢部小の6年生の保護者からの申し込みがあった。これでとりあえずは、製作会はできる。続いて、20時過ぎにピンポーンが鳴る。今度は兄弟での申し込みだ。これで3名。そして次の日、学校で2件の申し込み。そして締め切り日の金曜日に1名の申し込み。これで6名。「インストラクターは、10名以上確保しているけど、6名も集まれば、まあ、よしとするか。」と思っていた時、学習発表会である保護者から、「先生、あと二人お願いしたいんだけど、大丈夫？」「ええ、もちろん。」ということで8名の申し込みになりました。何かを募集している企画をしている人は、申し込み状況がいつも気がかりだということを感じた。

4　一方のインストラクターは

インストラクターは、電波適正利用推進協議会の先崎さん、伊藤支部長、そして私も入れて、全部で12人が集まってくれた。青少年のための科学の祭典でも活躍している方も多くベテランである。休みの日を返上して、厚沢部まできてくださり、しかも、全くのノーギャラである。「ギャラは、子どもたちのラジオを完成した時の笑顔で。」がお互いの合言葉である。

当日は、先崎さん、伊藤さん、私が全

体をみて、あとは子ども一人ひとりと希望したお父さんについていただいた。

インストラクターは、ラジオ作りは、若いころから半田つけはお手のもの。技術はバッチリである。でも如何せん、60代、70代、80代、目が年なりで、細かい部品がよく見えない。持参した拡大鏡などを駆使して指導にあたってくれた。

子どもたちへの指導は慣れたもの。優しくプリント基板への部品の取り付け、半田づけの要領を説明してくれます。特に、やけどをさせないという半田づけへの配慮には、安心してお任せできるメンバーである。

5 子どもたちは

ラジオは、分かっているものの、どんな部品でできているのか、そして、半田付けももちろん初めて。キットの袋を開けて、初めて見るものに、目を輝かせる。はじめ、おっかなびっくりだった半田づけも、「富士山ができるように上手に半田を溶かすんだよ。」の指導で、半田付けも上手になってきます。2か所ある半導体も高学年は自分で半田づけしていた。

今回のキットは、線の半田付けは、イヤホンのみ。昨年は、スイッチ、バリコンなどをリード線で結んでいたので、子どもたちにとっては、より作りやすくなっている。

部品も、全て取り付け、電池を入れて、電波を拾いやすい窓際へ行く。「鳴るか」子どももちょっと不安であるが、それ以上にインストラクターも心配顔。「つまみを回してごらん。」のアドバイスに、ゆっくりとバリコンを回す子どもたち。不安な顔が、笑顔に。この瞬間をインストラクターは待っていたのです。「先生、聞こえたよ。」と声に、インストラクターの苦労も吹っ飛ぶ。「お母さん、聞いてみて。」喜びの輪が広がっていく。

6 事業を終えて

子どもたちにはどんな才能があるかわからない。しかし全ての子どもたちすばらしい才能を秘めていると思っている。才能という種子は、環境がそろわなければ

発芽しない。一生発芽しないで終わってしまっていることがあるかもしれない。種子が発芽する環境は、保護者が、そして大人が作ってあげなければならない。

私も小学校四年のラジオが聞こえた小さな経験から、アマチュア無線に出会い、今はとてつもない大きなアンテナを上げるまでになった。コンピュータに出合ったのもアマチュア無線の延長線上にあるのも縁なのであろう。

保護者には、子育ての期間は、長い人生の中でも、高校で家から離れるとしたら0歳から15歳、たった15年。これで、子どもの人生が決まると言っても言い過ぎでないと私は思う。保護者には「子育てしているうちが親としての花。特に、子どもが小学校を卒業するまでが親として一番楽しい時であり、子育てを楽しんでほしい。」私は機会あるごとに訴える。

学校でもらう様々な募集のプリント。今回のラジオ作りもそうであるが、スルーしてしまえば、それまでであるが、学校で配布される以上、その一つ一つに募集は、企画者の意図があり、子どもたちの才能を引き出そうとしている。

ピアノ、そろばん、スポーツ、書道、絵画、子どもたちには、小さいころにいろんなものを経験させてほしいと思う。もちろん芽が出るものもあるだろうし、そうでないものもある。でも経験がなければ芽が出ようもない。

子どもたちにしっかりとした生き方を教えること、子どもたちの才能を磨き、21世紀の舞台で光り輝かせるのは、のは大人の使命であり、責任であると思う。

子どもたちのための
ラジオ作り教室

令和元年10月22日（火・祝）
厚沢部町図書館視聴覚室